

Flakpanzer IV Sd.Kfz.161/3 Möbelwagen

Möbelwagen of s.H.PzJg.Abt.655 in Oldenburg, 1945

Modeling & Text, Photograph
Kunihito Kawamura



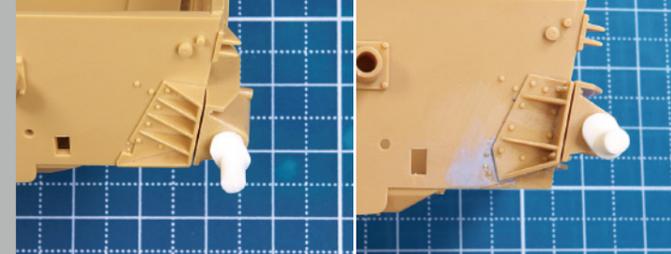
放棄または撃破された実車写真集「PANZER WRECKS」は、戦中、戦後に撮影された未発表写真の数々で構成され、これまで知られていなかった特殊車両や撃破されているからこそ見ることができるディテールなど、見ていて飽きることがなく、AFVモデラーを魅了し続けている。そんな「PANZER WRECKS」6号表紙はカッコ良いメーベルワゲンが飾っている。英兵が寄りかかるその車両は前面の可動式装甲板に砲を避けるための大きな切り欠きがあり、通常の顔つきとは随分印象が違い精悍に見えるが、それとは対照的にアヒルのようなパーソナルマークが正面に施され愛嬌を放つ。車体側面には捕獲時に書かれたのか白い「X」マークがあり、英兵の姿と共に役目を終えたことを象徴しているようだ。

15 ページの解説を読むと同誌 2 号にも同じ車両が掲載されているとある。見ると右後ろからの別ショットで可動式装甲板は閉じたまままだけれど砲は後ろ向きに変えて、これがまたカッコ良いメーベルワゲンの姿。「うーん! カッチョえー!、これは作りたい!」と、言うわけで、この 655 重戦車駆逐大隊所属 011 号車をタミヤのメーベルワゲンを使い再現することにした。

タミヤのメーベルワゲンは試作型をモデル化した MM101 と量産型の MM237 の二つがある。勿論、今回は量産型の MM237 を使う。このキットはほとんどの部品数で上手くディテールを再現した組み立てやすいもの。車体上部はエンジンデッキとフロントフェンダーが一体成型され、残念ながら車体上部側面には抜きテーパーが付いている。可動式装甲板はやや肉厚なもの後期型の一枚板装甲を再現してる。尚、実車の初期型は薄板二枚重ねで、上端に折れ曲がりのある形状なので、初期型のモデル化も望まれるところ。ドラゴンあたりが何時も模型化してもおかしくないだろう。



<http://www.panzerwrecks.com/>



キットはシャシーから組み立て始めるが、まずパーツの状態で 011 号車の特徴を加工していく。メーベルワゲンの誘導輪基部は通常の 4 号戦車と異なり補強リブの少ない簡易型が装着されている。これはソミュールに残る実車で確認できるが、メーベルワゲンの戦場写真でもこの部分が写っている写真全てが簡易型に見える。筆者はこれはクルップゲルソンの特徴と考えているが、この 011 号車でも同様だと推定しキットのリブを彫刻刀とナイフで切り取り簡易型を再現した。



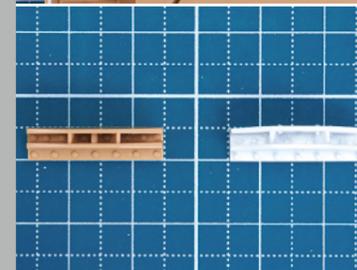
次に車体側面の燃料注入口蓋を後期型の簡易型に作り変えた。キットのモールドを手早く削り取るため今回はモーターツールのビットをグラインダーで加工して平らな面で削るエンドミルを自作し、機械の力を借りて一気に加工した。加工後はペーパーで仕上げるが、あらかじめ平らな面で加工できるので作業は大変楽できた。



車体前半上部は車体上部と一体成型されているが、フェンダーを取り外すことから一旦切り離しシャシーに接着。内側に補強を入れてやり車体上部を乗せ前面装甲パーツ下端の隙間が均等幅で残るよう調整した。このような実際に存在する隙間を上手く再現することでリアリティが増すと思う。



車体上部は側面の抜きテーパーは無視することにして左右スポンソン部裏側の穴を塞ぎ、フェンダー部分の厚さだけ裏側を彫り込んだ。これは左前フェンダーを外すため、そのときにこの厚みが見えてしまうため、薄くしておく必要があるからだ。

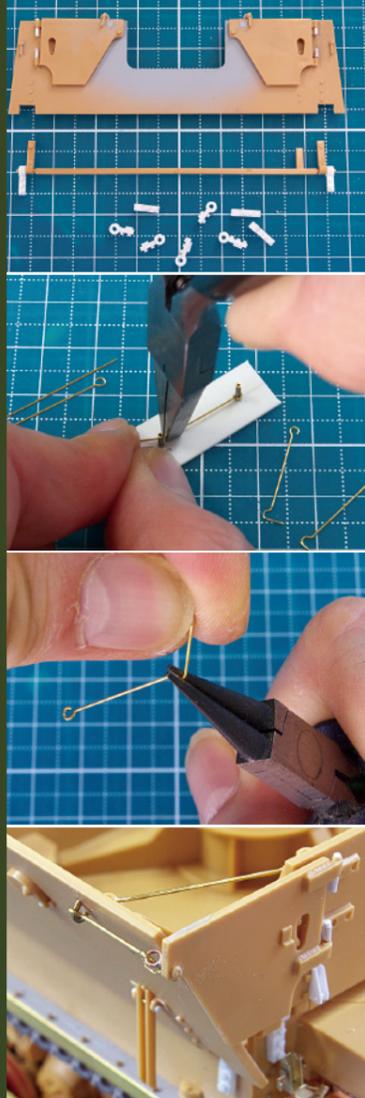


車体後部では牽引用のアンカー部分が、やや厚みが有り過ぎると抜きテーパーで端面がおかしな形状をしているのでプラ板で作り直した。

その他、車体側面に履帯連結ピン抜け防止用の打ち込みガイドをプラ材で自作して取り付けている。

Flakpanzer IV Sd.Kfz.161/3 Möbelwagen

Möbelwagen of s.H.PzJg.Abt.655 in Oldenburg, 1945

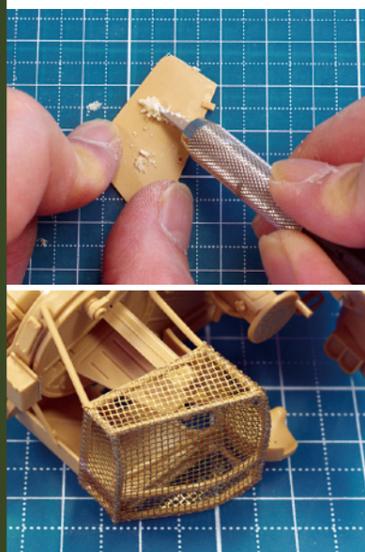


可動式装甲の大きな切り欠きは弓鋸を使って慎重に切り取りヤスリで仕上げた。装甲板を可動させることと後の塗装で分解も出来るよう、可動ヒンジ部はプラ材で作り変えシャフトは短いものを差し込み式にした。可動部の軸受け部分はパイプと角棒の接着部分に真鍮線を仕組んで強度を確保した。

可動式装甲板を箱状態に固定したり半展開状態に固定するアームは強度と細さを得るため真鍮線で作り換えた。同じサイズで4個作るため、均等に作れるよう簡単な治具を用意した。先端を丸めるにはビーズアクセサリ制作用の丸ペンチを使うと簡単に作れる。前面と後面の補助装甲板にアームをひっかけるためのリングは0.25ミリの銅線を丸棒に巻き付けて丸めたものを切り出し、シャフトをハンダ付けして作った。これらの真鍮製アームはG S Iクレオスのメタルプライマーを塗ってから塗装したが、完成後可動により塗装が剥がれたので、一旦取り外して塗料を落とし、下地処理に黒染めし、更に鉄道模型用の強力なマッハ模型のメタルシールプライマーを塗り、半乾燥状態でG S Iクレオスの溶剤系塗料で塗装し直した。



履帯はドラゴンのマジックトラックを流用した。接着はベルト状態まで連結させたら乾きの遅いプラストラクトのリモネン接着剤をザッと塗り流し、数分間乾燥させ程よい硬さのところシャシーに巻き付けた。リモネン接着剤を使うと帯状態を保つしっとり感と自然に曲がる柔軟性がバランスしていて、まるでベルト式履帯を巻く感覚で作業できる。最後の連結部分や外れそうな所はG S IクレオスのセメントSを流して接着。位置を固定するため上部支持輪を履帯に接着。一晩以上充分乾燥したらシャシーから取り外して塗装した。尚、転輪や起動輪、誘導輪は接着していない。



3.7cm Flak43 の防楯はキットのモールドが良いので裏側から薄く削って使用した。砲自体は素組みで排莖莖部のネットを追加し砲身をアルミ製挽き物製品に交換した。

3.7cm Flak43 の防楯はキットのモールドが良いので裏側から薄く削って使用した。砲自体は素組みで排莖莖部のネットを追加し砲身をアルミ製挽き物製品に交換した。

タミヤのキットは細部の表現で形状の誇張や省略が見られるものの、プロポーションは大きなデフォルメもなくなかなか良好だ。最新のドラゴン4号シリーズと比べるとやや見劣りする部分もあるが、組み易さや入手のし易さなど勝る部分もあり、今でも充分通用する。このタミヤのキットは旧キットからリブレスされたものなので、シャシーの基本寸法や形状は充分にリサーチされ正確に作られている。4号車台のバリエーションに対応させるため車体前部と後部が別パーツになっており、車体前部の装甲厚違いへの対処方法は分割数を抑える為か、微妙に実車と異なる印象を受ける。車体側面には抜きテーパーが付き、フェンダーまで一体成型で組み良し優先となっている。こうしたキットの仕様による形状の狂いは本当に微妙なところに落ち着かせてあり、組んでしまえばあまり気にならない。どうしても気になるのならドラゴンのキットをベースに制作すればよいので、ここではタミヤベースの手軽さ優先で制作を進めることにした。

そうは言っても今回制作する011号車はフェンダーが外れており、その状態をリアルに再現したかったので、車体上部からフェンダーを切り取るなど大掛かりな作業になってしまった。作業はそのあたりに集中させ、3.7cm Flak43 はキットの良さを生かして殆ど素組みにした。

戦闘室可動装甲板は可動させるかどうか悩んだが、ここでは可動させることでメーベルワゲンの多様な表情を楽しめるようにした。そのための作業は本来の目的である011号車の再現にはあまり意味がないのだが、可動装甲を展開させないと3.7cm Flak43を旋回させて後ろ向きにすることが出来ず、結果的に可動させるのが正解であった。ただ、本作品では可動装甲板の厚さが有り過ぎる為、可動軸の位置調整でクリアランスを多く必要としたため、車体と可動装甲板下端との間にやや広い隙間が出来てしまった。これは少し失敗だったと思う。

履帯はキット付属のものではなく、手持ちのジャンクパーツからドラゴンのマジックトラックを流用した。市販の可動式を使うところだが何時も使っているの今回はマジックトラックに「挑戦」した。筆者としては使用経験が浅く、コツを掴む良い経験ができた。詳細は左欄に記したので参照願いたい。



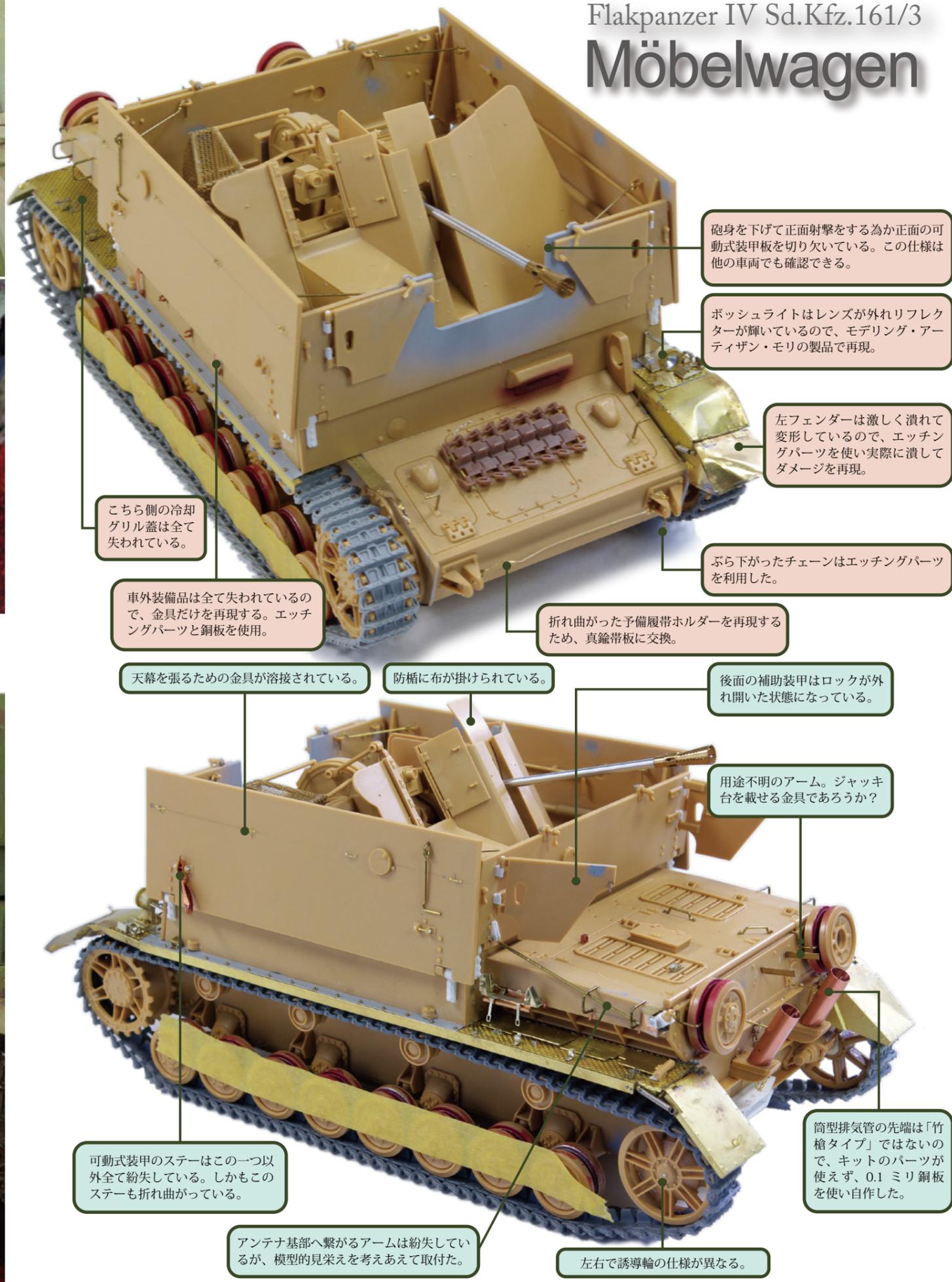
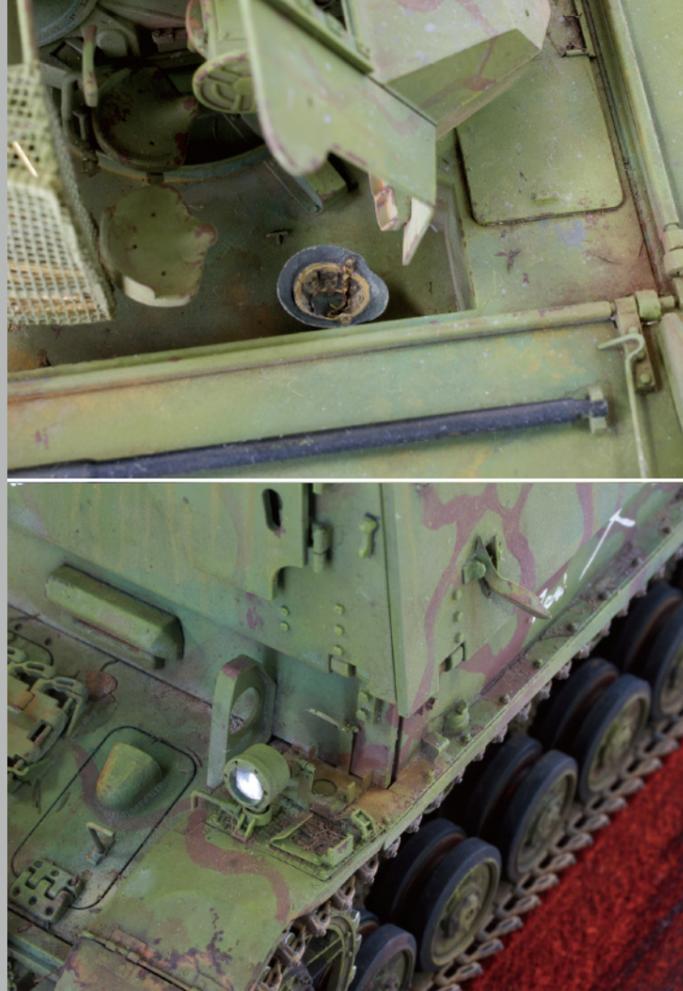
Flakpanzer IV Sd.Kfz.161/3
Möbelwagen

011号車の形状や仕様の特徴は次ページを参照したいが、それだけでなくマーキングや迷彩も特徴的だ。まずは車体色だ。写真のベースカラーはかなり暗く写っており、樹木の枝のような暗く濃い色の迷彩が描かれている。一見してグリーンベースにブラウン系の帯迷彩と推定できるが、この写真をPCに取り込み画像加工ソフトでコントラストを誇張させて検証すると、単色に見える部分にほんやり明るい色の領域が見えてくる。もしかすると暗めのダークイエローとオリーブグリーンの迷彩にブラウンの帯を重ねた3色迷彩であり、写真はベースカラーの一角が強く感光している可能性がある。この検証を元に3色迷彩で塗ることも考えたが、仕上がりは写真の印象と異なると予想できる。それでは011号車の再現モデルに見えないと考え、当初の印象通りグリーンベースにブラウンの帯迷彩で仕上げた。何しろ確定的な資料がないので印象のまま素直に塗るしか方法がない。

塗装はGSIクレオスの溶剤系Mrカラー303番にダックエッググリーンを足して明るくした色を全体に塗った。この303番はロシア戦車に詳しい方に教わったのだが、ロシア軍の4B0という色に近く、面白いことにRAL6003オリーブグリーンにもそっくりだ。もともと両者は同じ色なのかもしれないと妄想してしまう。さて、ブラウンの帯迷彩はハンプロールの160番をそのまま筆塗りした。良く乾燥させたらハンプロールでフィルタリング。油絵の具のローアンバーでウォッシングして、更に各部の塗り分けや汚れを描き込んだ。マーキングはハンプロールの白で手描きした。車両番号とバルカンクロイツはエシュロンデカールのAXT351007に入っているものを流用した。

ウェザリングにはピグメントを使い、落葉やダストを撒いて野ざらしな演出をした。

フィギュアはウルトラキャストのタンククルーがピッタリ。上着が余計なのと寄りかかり具合が写真と異なるが、雰囲気は上々。首の向きを少し変えて使用した。塗装はハンプロールで下塗りし、油絵の具でシェイドとハイライトを塗りブレンディングしている。衣服はハンプロールのマットパーニッシュで仕上げ、肌の部分にはクリアーを薄く塗って質感の違いを表現した。



砲身を下げた正面射撃をする為か正面の可動式装甲板を切り欠いている。この仕様は他の車両でも確認できる。

ボッシュライトはレンズが外れリフレクターが輝いているので、モデリング・アーティスト・モリの製品で再現。

左フェンダーは激しく潰れて変形しているため、エッチングパーツを使い実際に潰してダメージを再現。

ぶら下がったチェーンはエッチングパーツを利用した。

こちら側の冷却グリル蓋は全て失われている。

車外装備品は全て失われているので、金具だけを再現する。エッチングパーツと銅板を使用。

折れ曲がった予備履帯ホルダーを再現するため、真鍮帯板に交換。

天幕を張るための金具が溶接されている。

防橋に布が掛けられている。

後面の補助装甲はロックが外れ開いた状態になっている。

用途不明のアーム。ジャッキ台を載せる金具であろうか？

可動式装甲のステーはこの一つ以外全て紛失している。しかもこのステーも折れ曲がっている。

アンテナ基部へ繋がるアームは紛失しているが、模型の見栄えを考えあえて取付た。

筒型排気管の先端は「竹槍タイプ」ではないので、キットのパーツが使えず、0.1ミリ銅板を使い自作した。

左右で誘導輪の仕様が異なる。

Möbelwagen of s.H.PzJg.Abt.655 in Oldenburg, 1945

Flakpanzer IV Sd.Kfz.161/3 Möbelwagen

1/35 scale

TAMIYA MM 237 Möbelwagen Sd.Kfz161/3 3.7cm Flak auf Fgst Pz.Kpfw.IV [Sf]
PERFECT METAL GUN BARREL No.35-001 3.7cm Flak36/37
ABER 35A99 German tool holders-Late used from 1943(new release)
35A09 Fenders for PzKpfw IV
MODELING ARTISAN MORI No.MGP17 German Bosch headlight set
ARMORSCALE A35-002 3.7cm Flak36/43
ULTRACAST 35035 Canadian/British Tank Crewman Europe-1943-45
DRAGON Magic Track
and use other detail up parts.

